

あった。

昭和二十年八月十七日ソ連軍の浮虜となり、十一月九日までソ連のための戦後処理に当った。十一月九日ソ連浮虜としてケームル アンゼルスカヤ浮虜収容所に収容され、昭和二十四年八月帰国までこの地において、除雪、農作業、鉄道工事、建築工事、煉瓦工場及炭鉱等の重労働、なかならず炭鉱以外の時には十数時間に及ぶ苛酷な労働を強制され、栄養失調、意識不明のまま収容された例もあり、筆舌に尽くし難い厳しいものであった。

昭和二十四年ソ連より舞鶴上陸で帰国した。帰国先は父の本籍地瑞浪市日吉町七八六八番地であった。

昭和二十五年九月三十日土岐郡駄知中学校長が来宅され、同校勤務を勧められたので承諾し服務した。昭和二十六年一月一日岐阜県教育委員会土岐地方事務局に勤務した。昭和二十六年三月十七日土岐市泉町定林寺八番地、高橋元吉二女高橋和恵（大正八年十一月三日生）と婚姻した。昭和二十八年九月十五日岐阜県教育委員会事務局学務課免許検定係長となる。昭和三十年一月一日土岐市駄知町山津製陶株式会社専務を昭和五十年五月三十日まで

で勤めた。昭和五十一年十月より土岐市土岐津町高山工業（建設業）の囑託、昭和五十二年十月より土岐市妻木町日研工業（油薬製造）の囑託、昭和五十三年十一月より土岐市泉町石黒商事（燃料製陶用具販売）の総務部長を昭和五十年二月まで拝命し、これをもって他への就職は一切しないことにした。

悲惨な引揚者

子々孫々に再びとさせたくない

長野県 金子 一

海外居住の動機と家族状況

私は郷里の村役場に勤務して居りましたが、昭和二十二年朝鮮巡査の募集があつて、村の駐在巡査が役場に来て之に応募する様にと薦められ私は長男でありましたが弟が一人ありました。この弟に家を相続させる事にして當時満蒙開拓青少年義勇軍とか移民とか五族協和王道楽十建設の理想を掲げての国家的大事業によって農村の不況

を救う為の国策であり自分達は之れに協力する事こそ国民としての道であり義務であると思つて満州迄でなくともその足掛りとして朝鮮でもと思つて志願することに年
老いた両親にも納得して貰つて受験の結果、幸か不幸か
長野県下三百五十人位の志願者の中から採用者は六人であつたがその中の一人として渡鮮したのである。

昭和十五年妻帯する事になり郷里に帰つて挙式を済ませて一緒に渡鮮したが親達も一家持つ事になるから嫁入り道具は全部送つてやるから住所が定まつたら知らせる様にと有難い親心、軍筒寝具類は来客用の分迄、盥から洗面器迄一つ残らず全部荷造りして送つてくれました。そして十九年八月には長女が生れ一家三人暮しとなりました。

終戦直前の生活

昭和二十年その頃になると生活調度品も一通り揃へることが出来て異郷の生活も漸く安定した頃であつた。八月十日ロシヤ軍に攻撃され署に備えてあつた銃器で抵抗したが支えきれずにここ迄来たと清津警察署の職員が威興警察署に来てそこで武装を解き警察寮に一應起居する

ことになったが、その頃威興駅に貨物列車にスシ詰になつた女子供を主体とした避難民が到着、威興府の国防婦人会の人達によつて握り飯やらリング等支給されて南下して行つた事態もあつた。ロシヤが日本との不可侵条約を一方的に破棄して攻め込んで来たのであつた。

そして十四日には天皇陛下による重大発表があるとの事だつたがそれが明日に延びたとの事、私は同盟通信社には何か情報が入っていないかと思つて同社を夜訪れると通信員が一人当直と稱して無線器の前に座つていたが八時頃になると、「何か入りますよ」と通信士が云うので固唾を呑んで見守つているとそのうち通信がとまつて今迄の文章は全部取消しする。と云う事で通信は止まってしまう通信士も変な顔をして「多田賞勲局総裁談話として若干入つただけで良く判らないがこれは陛下の重大発表に対する談話だと思われるが、戦争は終つたらしい」との事、自分は陛下の重大発表とはロシヤに対する宣戦布告のみ思つていたから何だか狐にでもつままれた様な気持でその夜は一應自宅に帰つて翌朝早く署に出勤する前に同盟通信に寄ると朝六時頃より受信したがそれは

陛下が敗戦による戦争終結を国民に告げる御言葉が受信されていて本日正午ラジオによって放送されるとの事で私はその電文を直ちに書き写して署長に報告、署長も直ちに警察部長を通じて道知事に報告した様子、そして署としても之に対する構えが必要である。

正午には天皇陛下の重大放送があるからと云う事で我が警察署にも高等係の部屋に一台あるラジオを使って全署員をそこに集合させて陛下の御言葉を聞いたのであるが内容が判然と聞きとれない。内容が判っているのは私と署長のみ。署長は全署員を前にして結局戦争は負けて降伏したのだ。然し我等警察官には国民の生命財産を守る義務がある上部より何等かの指示がある筈それ迄は今迄通り安寧秩序に努力する様にとの訓示があり皆今迄通り平常勤務に服した。そして日も暮れて夜になると威興駅前広場に大勢の朝鮮人が集り日本は負けた、ロシア軍が間もなく乗り込んでくる、そして朝鮮は日本から解放されて独立出来るんだ「万才」「万才」などと騒然とした状態で日本人は迂闊に街に出る事も出来ない程の騒ぎとなった。翌日からは鮮系署員出勤せず日本人署員の

みで勤務していると日本陸軍の倉庫が荒らされたと言う情報が入ったのでこのような事態、その他治安を保持する為に今迄私服勤務署員も全員制服を着て拳銃又は小銃を身につけて自転車に乗り五、六人位宛隊伍を作って治安維持の為の示威活動などをして約十日間位八月二十六日迄努めその日ロシア軍立会のもとに急遽出来た朝鮮保安隊に警察署を引き渡し、そして其の日のうちに警部補以上の署の幹部はロシア軍の自動車に乗せられ何れにか連れて行かれ、我等巡査部長以下の者は何等かの指図ある迄そのまま本署で待機する様に命じられて署の二階の一部を与えられた。翌日汽車で近くにあった飛行場整備に行くから直ちに駅に行く様にとの事でみなが隊伍を組んで威興駅に行くに乗る汽車が来る迄駅で待つ様にとのこと、そのまま三日程、仕方ないから当番を作って簡単な食事で小荷物置場でごろごろしていた。その間時々列車が入ってくる下車する人もいる。そんな状況下何の指令もなく命令もない為朝鮮語の上手な古参部長に代表として道庁に問うべく行って貰うと貴方達はまだいたのですか、もう用事はない筈です。と云われて来たとの事で、

なんだ馬鹿々々しい、それでそれぞれ家に帰る事になり私も自宅に帰るべく自宅近くの交叉点の所に来るとソ連兵が此方に来いと云う様な仕種をしてわめいている。俺の家は直ぐそこに見えている家だと云っても言葉が通じない。自動小銃でこづかれ乍ら連行されたところが憲兵分隊のあった門前そこに夕方迄待たされて誘導された所が威興永生女学校で入って見ると日本人の兵隊さんが沢山いて私達もその一教室に民間人のみ入れられ兵隊さんの好意で夕食を頂き不安な気持ちしていると夜になると私達の近所の人達が多勢連れて来られ何の為だか見当もつかない儘その夜を過ごし翌朝兵隊さん達は何処かに移動する為出発するべく庭に整列しているとの事、それでは兵隊さん達を見送りしようとして私達も庭に出て並んでいると、お前達も一緒に行くのだとの事、兵隊さん達は朝飯も済まし昼食も持っているだろうが我々はまだ朝食も食べていない、がそんな事は通用せず否応なしにそのうしろに列をなして自動小銃を持ったソ連兵に付添われ威興を出発した。途中道路傍に焼モロコシを売って居たお婆さんがいたのを見つソ連兵の隙を見てそれを買っ

て朝食代わりに食べ乍ら付いて行くと本宮にあった威興中学校の門前で一同行進を止めて小休止、そこで駐在所から引揚げて来て拙宅に同居していた兵庫県人の井上君と相談して捕虜として連行されるらしいと漸く気が付き我々は兵隊でないのだから逃げようと話が纏り善は急げとソ連兵の隙を見て部落の間を通って城川江の土堤の上に出て約一里も行けば威興に入るが途中威興と本宮の境を流れる大きな川がある少し上流に行けば橋があるが先程渡った時ソ連兵が二人自動小銃を持って立っていたから橋を渡る事は危険仕方ないから素裸となって着物は全部頭に乗せて泳いで渡り城川江の土堤を上流に向って歩き出すと小供が我々を見て「イルボンヒョンサー（日本人の刑事）」だと云っているので危険を感じ以前より心易くしていた家を尋ねたところ先程日本軍の行列を見ていたらその後から貴方が一緒にいるので心配していたところだ、早く家の中に入りなさいと云って奥まった部屋に案内され、息を殺して数時間、夕食を頂くと保安隊が来ると困るから悪いが馬小屋の中に藁を沢山積んであるからそこで寝て下さい保安隊が来たら裏側に壁穴がある

からこの毛布はそこに置かないで持って逃げて下さいとの親切に感謝して一夜を馬の横で過ごし夜明けと共に家の中に呼ばれて息を殺して一日過したが何日も此処で御世話になる事は出来ないで二人で相談の結果、大和町の我が家には子供を抱いた妻君達が心配している事は察しられるが地域的にそこへ行く事は危険だが知楽町に道庁勤務だった笹岡君がいるあそこは町はづれだから一度連絡をして貰うよう井上君に道順を教えて依頼した、彼もその気になり夜行って見たところ直ぐ来る様にとの事のでその夜のうちに笹岡君宅に引越しする事になり厚く礼をのべて別れを遂げて引越して漸く御世話になる事として沖さんが大和町へ連絡をそして共に連絡を取り乍ら約十日間位過ぎると町も大分落付いて来た様であるから家に帰っても良いだろうと云う事で九月十二、三日頃久し振りに我が家に戻る事が出来たが一日中カーテンもそのまま勿論玄関の錠は降ろして息を殺して生活していたが、その内こんな生活が何時迄続くのか今後どうなるのか又どうすれば良いのか逃亡して内地に帰る事が出来るか汽車に乗る事は出来ないとするや夜中にそっと逃げだすと

すると女子供を連れて歩くと何日要するかその間の食糧はとなると三十八度線を超える迄命が続かないではないかととなると打つ手はない。隣の家の娘が他所に行っていたが頭は坊主頭になり顔には鍋墨を塗って漸く家に戻る事が出来たとの事であった。

この様な状態でどうする事も出来ず頭を痛めていたところ約一週間か十日位すると私と井上君は警察官である理由で保安隊が来て手錠を掛けられ捕縄を掛けようとしたがその扱い方がわからないので教え乍ら縛って貰った警察署に連行され八月二十六日迄勤務していた警察署の留置場に入れられ入って見ると同僚の警察官が沢山先に来て入って居て顔見合せて苦笑いすると次々に隣室の取調室に連れ出されて拷問を受けるのが留置場内に迄聞える悲鳴で想像できる。これが敗戦と云うものか、いっそのこと鉄砲弾か爆弾であっさり死んだ人の方が幸福であったのではないのかなどと考えないでもなかった。そして刑務所に入れられソ連軍の手に渡され捕虜として強制労働、筆舌に盡せぬ程の苦衷、昭和二十四年十二月三日帰宅する迄に死んで行った人。数知れず誠に悲惨なもので

あった。

私達が二十年九月自宅から連れて行かれたあと残された家族は、家を接収された為に住む家が無くなり知り合いの人達がたづねて来て私の家は接収の浮目に会わなかったので次々と集り子供六家族が六畳と四畳半の家に暮らして二十一年五月迄生活命からがら裸一貫で漸く帰国したとのこと。

戦争をした為に国民は如何に悲惨な苦勞をしたか。これはホンの一例に過ぎません。

今後絶対に戦争はするべきでない事を子々孫々に至るまで永久に伝えたいと念願する次第です。

台湾から引き揚げた母子家庭

東京都 中村 信子

隣り駅で一人暮らしをしている母を訪ねると、話はずんで、帰宅は十一時、十二時ともなってしまう。母は

世界のできごとに関心が強く、記憶力も衰えていない。

母の家を出る時、必ず手を握りあう。そして祈るこれが決して最後になりませんようにと。

今年八十六歳になる母は、台湾からの引き揚げ者である。明治二十八年、日清戦争のとき、台湾に渡った通訳の息子が私の父、明治三十五年台湾へ渡った夫婦の娘が私の母である。二人は、東海岸蘇澳の小学校で幼なじみであった。父が台北第一中学に在学中、女学生であった母と書店で再会、二人はドストエフスキーについて語りあった。「ドストエフスキーとりもった縁よ」と母はいう。

そのあと、母は東京で女子校五年に編入学したが、家が倒産したため、進学をあきらめ、台北に帰って静修女学校の国語と書道の代用教員となった。

昭和の大恐慌の初めに二人は結婚、曲折を経て、世界に二つとかいわれる蘇澳の天然炭酸泉を利用した清涼飲料水製造工場を継ぐため、祖父のもとに帰った。が三年のうちの昭和十年、父はその頃台湾で猛威を振るっていた流行性脳脊髄膜炎になって、半日で世を去った。六歳